キズナエピソード

及川依子　2話

//ADV形式開始

//とびお自室

［とびお］

ん、なんだこれ？

［とびお］

ライブの翌日。

俺はスマホに見知らぬ連絡先が

登録されていることに気がついた。

［とびお］

あれ、最近誰かと連絡先交換したっけ？

そんなことを考えてみて、依子のことを思い出す。

［とびお］

どうやら、俺のスマホを奪われたあの時、

彼女の連絡先まで俺の方に登録されてしまったらしい。

［とびお］

ちょうどその時、電話がかかってきた。

依子からだ……！

俺は不安を感じつつも、意を決して電話に出てみた。

［とびお］

「もしもし？

えーっと、どちら様でしょうか」

［依子］

「どもどもー。みんなのアイドル、イコだよ？

とびおくんの電話でよかったかな？」

［とびお］

「え。誰？」

［依子］

「ひどーい！

ライブの後に、一緒にお話した仲でしょ？」

［とびお］

「え……、なんかあの時とは随分感じが……」

［依子］

「あー。あんときはウチも頭に血が昇っとったけぇ、

つい故郷の言葉つこぉてしもーたんじゃ。

……これで信じてくれたかな？」

［とびお］

あ、間違いない。あの時のアイドルの子だ。

［依子］

「そんなことよりも、あの日こと

誰かに言いふらしたりしてないよね？」

［とびお］

「もちろんだって」

［依子］

「ホントに？

……うーん、まぁどっちにしろ、ちょっと顔貸して？」

［とびお］

「え、えぇ……。

呼び出さなくても、本当に言ってないって！」

［依子］

「もう、ゴチャゴチャ言わないの。

後で場所をメールするから、来てね。

来てくれなかったらぁアイドルイズムで……家燃やす」

［とびお］

脅されてしまっては、しょうがない。

夜遅かったものの、俺は指定された場所へと

急ぐことにした。

//暗転

//人気のない公園・夜

［とびお］

指定された場所は誰もいない公園だった。

キィキィと音が聞こえたので見てみると、

依子が小さくブランコを漕いでいた。

［依子］

「あ、ちゃんと来てくれた。感心感心」

［とびお］

「脅されたら、そりゃ来るだろ。

それで、何？　いくら払えばいいの？」

［依子］

「ちょっと、イコのことなんだと思ってるのー？

お金なんて取らないよ。

……ちょっと、イコの愚痴に付き合ってほしいだけ」

［とびお］

「ぐ、愚痴！？」

［依子］

「この業界、愚痴の百もこぼさないとやってられないの」

［依子］

「アイドルじゃない、イコの本音聞いてくれたの、

キミくらいだからさ♪

うだうだ言わないで、付き合ってよ」

［とびお］

俺は無理やり隣のブランコに座らされ、

依子の愚痴を聞かされることになった。

［とびお］

地方でアイドル活動をして、最近東京でデビューしたこと。

現在、人気が少し伸び悩んでいること。

それでも、もっと売れるために毎日頑張っていること。

［とびお］

彼女の話は愚痴ではあるものの、

そこにはどこか前向きな空気が感じられた。

だから、ずっと聞いていても、不思議と悪い気はしなかった。

［依子］

「あー、なんか色々吐き出してスッキリした～

とびおは聞き上手だから話しすぎちゃったかも！

ありがとね。」

［とびお］

「なぁ、一つ質問していい？」

［依子］

「なに？」

［とびお］

「なんで、俺の連絡先を控えた時にさ、

あんたの連絡先も俺のスマホに登録したんだ？」

［依子］

「知らないよ。勝手に入ったんじゃない？」

［とびお］

「だったら、これからは気をつけろよな。

誰とも知らない人間に連絡先教えちゃダメだろ。

変なことに利用されたりしたら、困るだろ？」

［とびお］

依子が、ぽかんと大きく口を開けた。

かと思えば、次の瞬間には声を上げて笑いだす。

［依子］

「あはは。それ、キミが言う？。

じゃあ、なんでキミはイコのアドレス利用しないの？

そしたら、イコの愚痴を聞かなくてもよかったのに」

［とびお］

「それは、なんかフェアじゃないだろ。

……あと、一生懸命頑張ってる人の話を聞くのは

別に嫌いじゃない」

［とびお］

先ほど感じた本心を、ふと漏らしてしまう。

依子は再び口を大きく開け、

今度は柔らかいほほ笑みを浮かべたのだった。

［依子］

「あんた、いいやつじゃね」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

その微笑みを見たとき、

俺はこの前と同じ胸の高鳴りを感じた。

今度の理由は明白だった。

俺は依子という女の子に惹かれているのだ。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//2話終了